

## 日本小児感染症学会若手会員研修会第2回安曇野セミナー

## 幻のワークショップ概要

森内浩幸\*

## I. なぜワークショップを企画したのか？

成人学習の5原則というのをご存知だろうか？子どもたちに教えるのとは異なり、大人の学習には以下の点を重要視しなければ成果は望めない。

## 1. 活用の原則

「いつかそのうち役に立つ」という言葉には納得できない。日々の診療のなかで、すぐに実践できることを求める。そのためにもタイミングのよいフィードバックが必要となる。

## 2. 協力の原則

権威主義的に学習内容や学習スタイルを押しつけられることに納得できない。学習者のニーズに応じ、またその自主性を重んじて、ともに学習目標を設定し、学習計画を策定していく必要がある。

## 3. 工夫の原則

問題解決型の学習を好み、一つだけの正解を求めるのではなく、ブ레인・ストーミングも駆使して、おのおのが創意工夫し自由な発想を引き出しながら、新たな発見や革新を促す必要がある。

## 4. 経験の原則

一人一人の学習者がそれぞれ豊かな経験をもっており、それが学習をより効果的にする。またお互いの経験を交流させ、いろいろな立場に立って考えることによって考察を深めることができる。

## 5. 肯定の原則

すでに多くの経験を積み、自分自身の意見をもっている学習者は、頭ごなしの批判や否定的言動によって自尊心を傷つけられ、学習意欲が低下

する。教育者が学習者の意見を肯定的に受け止めることが不可欠である。

以上の点を踏まえると、本セミナーの受講者に対しても、一方通行的にレクチャーを聴くだけでは学習効果が薄いことがわかる。そこで、日常診療にすぐに役立つテーマをとりあげ、準備段階から役割分担しながら皆が参加して、お互いに積極的に意見を交換し、いろんな解決方法を練り上げ、チューターはそれを上手に促していくことを、このワークショップで目指したのだ。さらに、ワークショップで話し合ったことはセミナー修了後に論文文化して、学会誌に掲載することを目論んでいた。

## II. どのようなワークショップを企画したのか？

今回は、初日ワークショップに先立って行われるレクチャーの演題に沿ってテーマを設定し、以下のようにグループ分けをした。

① WS-1 [モジュレーター：田中敏博 (サポーター：木村宏)]

「脳炎・脳症の早期診断を確実にするためには？」

・市中病院でPCRの設備がないとき、あなたならどうする？

・高次医療機関への搬送のタイミングは？

② WS-2 [モジュレーター：金兼弘和 (サポーター：木村宏)]

「脳炎・脳症の治療をさらに改善するためには？」

・支持療法と特異的治療法の匙加減は？

\* 長崎大学医学部小児科

③ WS-3 [モジュレーター：小田慈（サポーター：多屋響子）]

「ワクチン後進国日本で小児科医は何をなすべきか？」

- ・同時接種する/しない？
- ・ワクチン個人輸入の善し悪しは？

④ WS-4 [モジュレーター：笠井正志（サポーター：多屋響子）]

「食中毒から子どもたちを守るには？」

- ・日本の食習慣の問題点・生活環境の問題点を探る。

以上のテーマを掘り下げていくために、事前に以下のような役割分担をしてもらった。

- ・事前のインターネット会議の司会者 1 名
- ・当日のディスカッションの司会者 1 名
- ・パワーポイントによるプレゼンテーションの用意をする者 2 名
- ・当日の発表者 1~2 名
- ・セミナー後の学会誌への報告分の執筆者 2 名
- ・事前の資料収集 2~3 名

モジュレーターの役目は以下の通りである。

- ・事前準備の手伝い—事前のメール会議に参加し、準備すべきことの助言を行う。
- ・当日のグループワーク (discussion) において、自主性を尊重しつつも、議論の方向性を誘導

する必要が生じた場合に援助する。

- ・セミナー終了後に、各グループがレポートをまとめる際に必要な助言を行い、できあがったレポートの校閲を行う。

### III. 残念ながら実施できなかったが…

当然のことであるが、このような企画にはかなりの時間を割く必要がある。もともと盛り沢山の計画を立てたなかで、はたしてどこまで踏み込んだ議論になるかという不安があったが、1 回目でもあり「まずやってみよう！」と飛び込んだのだが…。ご存知の通り、台風の影響で開催時刻が大幅に遅れたことを受けて、ワークショップの開催は流れてしまった。

ただ、レクチャーと連動させたテーマに沿って事前に勉強してきた成果は、別の形で現れたかもしれない。レクチャーの後の質疑応答が非常に活発になったのだ！受け身で話しを聞くだけのレクチャーではなく、自分自身がそれにかかわるつもりで勉強をしてくることで、レクチャーにおける学習効果も向上したように思われた。

今回の反省点として、とりかかるのが遅かったために、事前の話し合いが十分にできなかったことがある。来年度は早くとりかかって、短い時間のなかでも有意義な discussion ができるようにもって行って、本当の第 1 回ワークショップが成功裏に終えることができるようにしていきたいものだ。

\* \* \*